



文藝春秋・四月特別号・目次

表紙題「雷火」……………松村公嗣
 目次カット……………小林泰彦
 目次レイアウト……………星達也

将棋の海外普及……………羽生善治……………77
 男と女、どちらが強いか……………渡辺淳一……………78
 八十歳でチヨモランマ……………三浦雄一郎……………80
 人間模様……………芦田淳……………82
 仏教入門としての「ブツダ」……………岡田裕介……………83
 本を装う人……………林洋子……………85
 小林秀雄「山の上の家」……………茂木健一郎……………86
 関東大震災と一枚の古葉書……………柴田紳一……………88
 百年目のサクラ……………藤崎一郎……………90
 地中海の南側を眺めながら 日本人へ95……………塩野七生……………92

これが私たちの望んだ

日本なのか

大型
 超企

碩学泰斗 気骨 異能
 日本の叢知が総結集!

この国を変える警世の紙つぶて125個

養老孟司	伊東四朗	梅原猛	中曾根康弘	池田武邦
鹿島茂	御手洗富士夫	安藤忠雄	鶴見俊輔	立花隆
中野翠	佐藤優	山藤章二	嵐山光三郎	山内昌之
山川静夫	久石譲	浜矩子	亀井静香	佐々木俊尚
橋本治	渡邊恒雄	曾野綾子	佐伯啓思	宮脇昭
谷村新司	廣岡達朗	猪瀬直樹	小熊英二	川淵三郎
齋藤孝	井上章一	寺脇研	小池百合子	田原総一郎
坂村健	辻野晃一郎	池辺晋一郎	岡野弘彦	森喜朗
勝間和代	日枝久	加地伸行	佐々淳行	児玉清
外山滋比古	小菅正夫	徳岡孝夫	北尾吉孝	白崎勇次郎
佐高信	磯崎新	川勝平太	福原義春	香山リカ
片山豊	国谷裕子	後藤謙次	阿刀田高	河野洋平
吉本隆明	島田雅彦	猪木武徳	湯浅誠	柴田翔
亀山都夫	中村うさぎ	松本紘	片山さつき	赤瀬川原平
坪内祐三	保阪正康	岸田秀	藤原帰一	むのたけじ
舛添要一	森田健作	坂東眞理子	佛坂泰治	加藤紘一
清家篤	大木隆生	城繁幸	篠沢秀夫	西木正明
氏家齊一郎	海部俊樹	尾崎護	黒鉄ヒロシ	佐野眞一
手嶋龍一	金子兜太	加藤典洋	五味太郎	袈裟澤駿太夫
堺屋太一	佐瀬昌盛	武村正義	江崎玲於奈	松沢成文
中嶋嶺雄	森永卓郎	柴門ふみ	古川貞二郎	桐生五郎
扇千景	御厨貴	細谷孝至	村山富市	塚越寛
屋山太郎	鳥越俊太郎	所功	内館牧子	小野田寛郎
内田裕也	荻原博子	東国原英夫	鎌田實	北村泰一
水谷研治	西川善文	綿貫民輔	鈴木章	柳田邦男

二世山本夏彦何用あつて現世へ

天皇陛下を「多忙にしているのは誰か」斎藤吉久
 ゲゲゲとフーベル賞の女房貧乏でも愉しかった 鈴木陽子×武良布枝……………122

これが私たちの望んだ日本なのか

①民主党政権がなにもできないのではないと思います。政治にできることに限度があって、それだけのことじゃないんでしょか。問題は民主党でも自民党でもなく、国民一般じゃないんでしょか。お上に頼るのは、いい加減にや

めたらどうですか。私の個人的感想ですが、政治や行政は私のジャマばかりしてきましたよ。

か。街がちゃんとなるのは、個人でいうなら、住宅が立派にできたということとです。じゃあ庭はどうか。どう見ても手入れが行き届いていない。国土と自分が切れてしまいました。環境「問題」といいますが、その言葉使いにすでに環境と自分を「切る」思考が歴然と現れています。でも土から育ったお米を食べて、それが「自分になる」のです。それなら土は将来の自分じゃないですか。若い人なんか、夢にもそんなこと感じてませんよ。「自分は自分だ」などと思ってます。個人は頭ではなく、身体です。それを忘れたところに「頭で考えている」。政治と世界の

もう一度、モノについて本気で考えよ

養老孟司 (解題者)

〔編集部より〕
日本から活力や希望が失われて久しい。活路はどこにあるのか。答えを求めて、本誌は各界の識者の意見を募ることにした。そこで「これが私たちの望んだ日本なのか」というテーマの下に次の三つの問いのいずれかにお答えいただきたい、とお願ひした。

①政権交代から一年半が経とうとしているにもかかわらず、なぜ民主党政権は何もできないのか。どうすれば政治が機能するようになるのか。
②日本は長らく五里霧中にあるが、その原因は何か。そこから脱するにはどうすればいいのか。
③次世代に受け継ぐべき日本の財産、あるいはこれからの日本に必要な能力とは何か。その結果、百二十五名の方々から回答が寄せられた。

かない。本当の意味での自主性が問われているわけです。でも引退した年寄りが増えるばかり、それじゃあすることとがなくて当然です。

③国土は個人でいうなら、身体です。それがまず第一だと思います。国破れて山河ありますが、破れなくなつて同じです。その山河がどうなってますか。街がちゃんとなるのは、個人でいうなら、住宅が立派にできたということとです。じゃあ庭はどうか。どう見ても手入れが行き届いていない。国土と自分が切れてしまいました。環境「問題」といいますが、その言葉使いにすでに環境と自分を「切る」思考が歴然と現れています。でも土から育ったお米を食べて、それが「自分になる」のです。それなら土は将来の自分じゃないですか。若い人なんか、夢にもそんなこと感じてませんよ。「自分は自分だ」などと思ってます。個人は頭ではなく、身体です。それを忘れたところに「頭で考えている」。政治と世界の



と教えられました。この言葉は、まさしく今の私の心の宝です。「光り輝く日本一の千葉県」が私のキヤッチフレーズです。どのような逆境の時でも、「絶対にあきらめぬ」と

言いたい。

強い人間、輝く子供たちを育てるために、内面に根ざした道徳教育というものをしっかりとやっていく必要があると思っています。

残しておきたい言葉

衣食足りたら トキメキを求めよ

大木隆生



坂東眞理子

(昭和女子大学学長)

無縁社会を支縁社会に

昨年来、「無縁社会」という言葉がさかんに使われています。家族や友人、あるいは地域から孤立し、孤独死を真剣に心配する若者までいるといえます。どうして日本はこんな国になっ

てしまったのでしょうか。二十世紀初頭の日本は、「地縁・血縁社会」でした。三世代同居の大家族が当たり前で、親戚のおじさんおばさん、いとこなどが周りにたくさんいました。町内会や隣組など地域の共同体もしっかりしていて、隣近所で支えあう仕組みが確かにありました。そして、日本は戦後の焼け跡から奇跡的な高度経済成長を遂げ、「ジャパン・アズ・ナンバーワン」と呼ばれるまでになりました。その過程で農村から都市部への労働力の移転が起き、核家族化が進みました。

多くの日本人が会社のためにがむし

やらに働き、「社畜」と揶揄されたりもしましたが、会社が成長することで社員の給料は上がり、雇用も守られていました。福利厚生も充実し、一億総中流社会が生まれました。

地縁や血縁よりも会社の中での人間関係が重要になり、日本はいわば「社縁社会」になりました。

しかし、バブル崩壊以降、経済が停滞するなかで会社はかつてのように社員を手厚く守ることができなくなりました。倒産やリストラが相次ぎ、非正規社員が急増し、「社縁社会」も崩壊しました。会社から放り出された人を国家も救うことができず、逆に医療や年金など社会保障の綻びが露見しました。「無縁社会」はそうしてできあがってきたのです。

では、日本はこれからどうすればいいのか。私は二十一世紀の日本は「支縁社会（志縁社会）」を目指すべきだと思います。日本人は強い個人を理想とする一神教的な考え方を持っています。昔から頼り頼られる関係を重視

して「お互い様」という精神を大切にしてきました。先頃、大きなニュースとなったタイガーマスク現象も、困っている人を放っておけない日本人の性向が現れたものだと思います。「無縁社会」を脱するために、一人ひとりの日本人が緩やかに支え合う社会になればと思います。

佛坂泰治

(医師)

大和沈没を見届けた軍医長として

これは私たちの望んだ日本なのか
私は、かつて海軍の軍医として多くの激戦地に赴きました。沖縄海上特攻で戦艦大和が沈没した際には、駆逐艦「雪風」の軍医長として、大和などから命からがら脱出した戦友たち数百人を救助しました。戦争に参加した百七十三隻の海軍駆逐艦のうち、終戦まで無事に残ったのは私が乗っていた「雪風」を含めてたった三隻でした。私は非常に幸運であったと言わざるを得ま

せん。海軍軍医学校で机を並べていた同期の多くも、各地で玉砕を遂げました。

今日の日本の繁栄は、先の大戦で散華された数百万の方々のお陰であることを感謝し、いまだ外地で眠られている方の慰霊鎮魂、遺骨収集を急がねばなりません。

私は、九十一歳になりますが、現役の特別養護老人ホーム配置医として頑張っています。幸いなことに大きな病気を患ったこともなく、亡くなった戦友の分も働かないといけないと感じているからです。老人ホームには、入所待機者が六十名います。行政で一日も早く解消してもらいたいと願っています。

昨今、「無縁社会」や「消えた高齢者」などが話題となっています。私も医療・福祉の現場に携わっています。行きすぎた個人情報保護の弊害を感じています。地域の民生委員の方と話す機会がありますが、情報がなければ、民生委員は独居老人などに救いの

手を差し伸べにくい状況です。「担当

地域で孤独死が出たら、民生委員として恥だ」と語っておられました。行政と比べて情報はないのに責任だけはあるのです。家庭訪問をするためにも、名簿ぐらいは教えてください。

豊かになった日本では、美食で糖尿病になる人が増加しています。しかし、一方ではかつて存在した相互扶助の精神が失われつつあります。お互い助け合いの社会にするためにも、早急な対策を講じてもらいたいものです。

加藤紘一

(衆議院議員)

「悩みの先進国」となれ

なぜ日本が五里霧中に迷い込んでしまったのか、答えは非常にハッキリしている。これまで日本が抱えてきた二つの「課題」が終わってしまったからだ。

日本では、いわゆる「五五体制」

のもとで自民政権が永らく続いてきた。これは、「国会議事堂に赤旗は立てない」という政治体制である。自民党とは、反共保守の政党だったのだ。したがって、一九九一年のソビエト連邦崩壊でミッシェン・コンプリートとなり、存在意義を失ってしまった。

また、日本の明治維新以降の国是は「富国強兵」「脱亜入欧」であり、とにかく西欧にキャッチアップせよというものだった。ところが、八〇年代、「世界第二位の経済大国」に躍り出ると、ブラザ合意では逆にハンディキャップまでつけられてしまった。物質的には、欧米以上に豊かな生活を享受できなくなった。

本来であれば、その時点で次なる「大テーマ」について議論をすべきであったが、日本で巻き起こった論争といえば、選挙制度を変える「改革」、全国にある郵便局の民営化といった、国家の「大テーマ」とは言い難いものばかり。最近では、政権交代で日本が天國になるかのごとき論調まであった。

ぶことが好きな日本人であるからこそ有効だったわけです。西洋の学問・文化をこだわり無く受け入れ、それによって新しい産業社会を興し、懸命に働いて今日の繁栄を築いたのが日本人でした。

そして日本は世界の最先進国になりました。その豊かさを維持し、さらに高めるには、ほかのどの国にも作ることでできない、高い付加価値を持つモノやサービスを創り出すほかありません。そうした新しい付加価値の多くは自然科学、社会科学、人文科学の学問的成果から生まれるもので、学ぶことの好きな日本人の得意とするところであるはずで。

また世界一の少子高齢化の進む日本では、少しでも多くの人が労働力として生産に貢献することが望まれます。それでもなお労働力減少は避けられませんが、そのもとで経済活動を維持・発展させるには、一人当たりの生産性をさらに高めていくほかはありません。働くことが好きで、また学校で

これが私たちの望んだ日本なのか

よく「政治家にビジョンがない」と言われる。外交安保、経済産業、家族観など、ビジョンにもいろいろある。私は国民との対話を通じて、日本人の意識とそれにもとづく社会のあり方こそ、政治家に問われているのだと感じた。明治維新とは、グローバルゼーションであり、それ以前にはなかった西洋近代合理主義を日本に持ち込んだ。本来、日本人は「理屈」では動かない——それがわかっているのが民主党、特に菅直人総理なのだ。

夏目漱石は、『三四郎』の中で、日露戦争での戦勝に沸く日本を「滅びるね」と冷やかな目で見ていたが、まさに日本が「見えなくなった」瞬間を見抜いていたのだと思う。私は、明治維新以前の神道のあり方が、日本人にはベストではないかと考えている。こうした「国と社会のあり方」を論じることで、大きな課題が見えてくるはずだ。現在、中国やインドをはじめとする新興国が急速に経済発展をとげている。しかし、公共事業や新幹線整備

も職場でも学ぶことが好きで、自らの能力を高めることに喜びを見出す日本人の特性はその意味でも貴重です。さらにグローバル化の進む中で、文化や生活習慣の異なる人たちとの共生、協力がますます重要となります。これは異文化をこだわり無く受け入れてきた日本人の得意技でしょう。

つまり、直面する経済社会の高度化、少子高齢化、グローバル化といった大きな課題に対処するために最も必要とされる資質は、実は日本人がもともと持っていた良き資質でもあるのです。そうした美質を備えた日本人を家庭や学校でしっかりと育て、次世代に残していくことこそ、今なによりも大切なことだと思います。

大木隆生

(東京慈恵会医科大学教授)

富裕層の「死に金」をトキメキへ

私は、お金と水は似ていると思う。

は、日本がすでに半世紀前の高度経済成長期に済ませたことだ。彼らも、キャッチアップを終えて迷走する時期が必ずくる。そんなとき、日本は「悩みの先進国」であってほしいと願っている。日本国民は、「課題」さえ見付ければ、必ず答えを導き出せるのだから。

清家篤

(慶應義塾)

受け継ぐべきは日本人の美質

次世代に受け継ぐべき日本の財産として最も大切なもの、それはいうまでもなく日本人の持つ美質です。学ぶことが好きで、働くことが好きで、異文化をこだわりなく受容する。そういう日本人の特性がこれからますます必要になってきます。

『学問のすゝめ』を書いた福澤諭吉は、学問によって日本の近代化を進めようとしたが、それはもともと学

いずれも所要量なければ生死に関わるが、所要量（水なら二リットル程度）を越えて所有していても幸福度にほとんど差が生じないからである。無論、お金の所要量は家族構成や居住地域によって違うが、衣食住（座って半畳寝て一畳）足りた以上のお金を得ても幸福度はほとんど上がらない。例えば、八百円のラーメンと八千円のラーメンでおいしさの違いがあるであろうか？

富める者は余分なお金で幸福になるうとするが、数年前まで米国で年収一億円の外科教授だった私の経験から、豪邸や高級車で幸福が得られるという考えは幻想であると確信している。最も普遍的で、崇高なトキメキは他者に喜ばれること、評価されることである。だから、私は日米の学生や若者に「衣食足りたらトキメキを求めよ」と説いているのである。

千二百兆円の個人資産が示す通り、我が国には不況にもかかわらず所要量以上の資産を有している富裕層が沢山いる一方で、「衣食足りない」貧困層

が激増している。日本には、もうちょっとのお金で格段に幸福になれる貧困層と、十分にあるお金を用いてトキメキを入手したい富裕層がいる。

経済成長に頼らずに総幸福度を上げるには、両者のニーズを同時に満たすことが必要である。そこで、富裕層から貧困層への経済的支援を可視化することにより、富裕層はその受け手からの感謝というトキメキが得られる。双方の幸福度がアップする上に、内在する善意が喚起された良氏は、率先してトキメキが得られる富の再分配をするのではないだろうか。

高い税率で富裕層の資産を徴収し貧困層に再配分する北欧型の制度は、富裕層の不公平感を増長するばかりか、一生懸命働く動機を失う者もいるであろう。そこで、高額所得者の税率を引き上げる代わりに、増税分は直接それを必要としている個人あるいは団体に寄贈できるようにする制度こそ望ましいと考える。最近では、「タイガーマ

②五里霧中のワケ
産業構造から税制、社会保障制度まで、誤魔化し誤魔化し維持し続けてきたあらゆるシステムが機能不全を起している。これらを全部リセットして作り直す以外に脱出法はない。ところが、政権交代以後、政治の場でも一向にこうした議論がなされていない。理由は単純で、国民の側にそうした議論を受け入れる素地がないためだ。政治のリーダーシップ不足は明らかだが、それだけですべてが解決するわけではない。

③日本の財産、必要となる能力とは
古来より、日本は常に外部から新し

スク」による寄付が話題を呼んだ。「死に金」となっている富裕層の資産を、トキメキと引き換えに貧困層の「生き金」とするのである。

村社会には存在価値のない人材はいない。生産性の低い者がいるからこそ、優秀な村民ががんばる意義が生まれるのだ。こうした善意に満ちた村社会の再構築こそが、資本主義と表裏一体の格差・孤立化社会に対する解決策であり、ゼロ成長でも総幸福度の最大化が図れるのではないか。

前述した通り、私は米国で血管外科教授であったが、喜びを分かち合える仲間のない孤立社会では、高額な収入も、天才外科医の称号も虚しく、無人島でノーベル賞を受賞したような想いだった。行き過ぎた競争社会のアメリカでは、明日は我が身と疑心暗鬼に陥っている勝者も、惨めな暮らしを余儀なくされる敗者も幸福からは程遠かった。そこで二〇〇六年に仲間のいる母国・母校に戻ったが、帰国にともな

い価値観や文物を取り入れ、消化していく柔軟さがあった。明治以降の発展も他のアジア諸国よりその点で優れていたためだ。ところが、そういった進取の気性が、社会全体から急速に衰えているのを強く感じる。

いまだに階級闘争ですべてが解決すると信じている左派は論外だが、保守の中にも頑迷固陋ぶりが目に余る。徹底した規制緩和と自由化の中で勝利する道を探ることこそ国益であり、既得権と無価値な慣習にしがみつくのは単なる老害だ。今こそ日本人は「保守せんがために改革する」というパークの言葉を思い出すべきだろう。

篠沢秀夫

(学習院大学名誉教授)

日本の現実の姿を 皆で確認しよう

戦前、戦中、戦後、日本は一つ。いやき、江戸時代から一つだ。その事実

って年収が十分の一になったにもかかわらず、富裕層の仲間入りを果たした米国時代より格段のトキメキが得られている。この事実こそ、本提案が机上の空論でないことの証左であろう。

城繁幸

(入事コンサルタント)

進取の気性を 取り戻せ

①民主党政権はなぜ何もできないのか
末期の自民政権と同様、民主党政権は、支持層の御用聞き能力しか持っていない。山積する課題に答を出せずにいるのは、それらすべてが、民主党のお客様に痛みを伴うものだからだ。

民主党が政党として機能するためには、顧客の使い走りをするエージェントではなく、課題と解決策を提示した上でそちらに誘導するコンサルタント能力を持つしかない。とりあえずは、行政の無駄で財源は賄えなかったのだ

を世の心が乱して来た。「西洋に迫り着け、追いつけ」という明治の心が、西洋を手本とするあまり日本を低く見、前の時代を封建制と蔑視した。そして、昭和敗戦で、進駐軍、つまり占領軍の宣伝教育により、「日本国民は他国の民と同様に日本の軍国主義の犠牲者」とイメージされ、敗戦前の日本を批判するのを良しとするマスコミのターゲットが固まった。進駐軍の手先だ。それが次の世代にも引き継がれたのが、進駐軍の手先の弟子だ。テレビに多かった。

だが、よかった。ソ連崩壊後、だんだんと、テレビから進駐軍の手先の弟子が消えた。この連中は、国歌や国旗に関する論議で、日本が戦前、戦中と同じ国歌と国旗を保つことを、偉そうに批判していたが、何の効果もなかったのが、足元を揺るがしたか。

彼らが手本のように言っていたドイツでは、戦中のナチス国家の事実上の国歌はナチス党の党歌だった。戦後に